

佛教大学

仙教文化研究所報

第 2 号

昭和60年 3 月31日
発行

目 次

・ 求道の聖者法然の修学	坪井俊映……1
・ 還愚の菩薩道	梁 銀容……9
・ 劉氏稿「經部義」試訳稿	神谷静治……2
・ 華文読解の為に	勝木太一……4
・ Nāmarūpaśāstra の心所相	樹田善夫……6
・ 応論の考察	梁 銀容……9
・ 説一切有部の一問題点	梁 銀容……9
・ 高麗時代の道教と仏教(下)	梁 銀容……9
・ 中論の研究—anirvadya—	梁 銀容……9
・ 観音信仰を中心とする教団群	前川重綱……12
・ その現況と特色	妹尾匡海……1513
・ 華林園と仏教	藤井照之……1513
・ 中国に於ける仏教の受容	松岡誓純……221917
・ アジャセ異名考	松永知海……221917
・ 事業報告・編集後記	松永知海……221917
・ Kamavai の阿含的表現	本庄良文……24

求道の聖者法然の修学

——還愚の菩薩道——

佛教大学教授 坪井俊映

法然上人は当時の人々より「智慧第一の法然房」といわれて、称讃されたほどの学識のある人であり、生涯、聖教の研鑽につとめられた学人である。寿永二年、上人五十一歳のとき、木曾義仲の軍勢が京都へ乱入し、洛中が一時不穩の様相を呈した一日のみ、聖教を見なかつたと述べられたほど、日々の学業研鑽につとめられたのである。さらに『一期物語』によると、

「惣じて吾朝に来到するところの聖教乃至伝記目錄一見せざるることなし」とあって、上人はいかにひろく各種の書物を披覽勉強されたかを知ることができる。

このように上人は常に經典積書の修学研鑽につとめられたのであるが、上人は自身の学解をほこり、多聞広学を誇示されることなく、「愚痴の法然」、「十惡の法然房」と自から呼んでいられる。この愚痴とは有智に対する言葉であって、智者賢者に対して自身の愚者たることをいわれたものであり、仏教が説く三煩惱(貪欲、瞋恚、愚痴)の一つである「ものの道理に暗い」自己をいわれたものと考ええる。これは上人の深い自己反省をいわれたものであって、長い修学修道によって得られた深い学識によって見出された自己である。

また上人は自から「戒定慧三学の器にあらず」ともいわれているが、上人の生涯は大乗菩薩道において説く戒定慧三学を実修実践された三学の生涯であったと見ることができ、「三学の器にあらず」といわれた人が三学を真摯に実践されたのである。そして、この戒定慧の三学を極めることによって見出された自己が「愚痴の法然」ということである。これを還愚痴という。この還愚痴の愚痴とは学問もせず、修行もつとめない怠惰なまけものの愚痴ではない。学業を励み智慧をみがいて、修行を積むことによって、人間的智慧知識の限界を知って、自己の不完全不十分なることを自覚

された言葉である。人間はだれでも、自己自身を知ることとはなかなかの難事である。他人のことはよく解つていても、案外自分自身については知らない。これは自分自身の顔を直接見ることでできず、また知ることができないのと同じである。しかし、自分自身はなかなか解りにくいものであると知るとは、自己を知る初めであるとともにその基をなすものである。

人間はだれでもウヌボレの心をもっている。そのためにややもすると道をふみ誤り、また進歩のあゆみを止めることがある。学問研究の分野においても同様である。自己の研究成果に満足して、ウヌボレの心を起したときは、研究の道は閉ざされてしまう。いうまでもなく学問研究は真剣であり、自己の学識の全てを集中した研究であることは勿論のことであるが、後になって自己の発表した研究成果を眺めたときには、力の至らざることに反省させられるものがある。

ある学者の言葉である。「自分は多くの論文や書物を書いたが、さてこれが活字になり、一冊の書物となった時は恐ろしくて見る気がしない」と。常に新しい知識を吸収して研究に励んでいる真摯な研究者にとって、一篇の論文、一冊の著書の完成は大変嬉しいものであるが、反面、さらに新しい知識や見解を知ることによって、自己の未熟さがわかり「見るのが恐ろしい」という言葉が出るのであろう。このように、自己の未熟さを知るとは、法然上人が「愚痴の法然」といわれた考えと同じであって、学業の研鑽に励み、研究に精進努力すればするほど、見解の狭さ、学識の未熟さが知られて、さらに一段と精進努力の心が振起るものと思われる。

法然上人が「愚痴の法然」といわれた言葉の背後には戒定慧の三学を修学実践する大乗菩薩道があり、これを学び極めることによって到達された心境が「愚痴の法然」ということであるから、これは大乗菩薩道を百尺竿頭一步を進めた「還愚の菩薩道」ということができるであろう。学問研究に志ざす学徒においても同様であろうと思う。かかる法然上人の「還愚の菩薩道」の精進をつねに心の底に止めて研究に精進するのが学徒の道ではなからうか。